

No. 580【2023年12月1日配信】

藩政時代の村々の馬(担当:工藤大輔)

こんにちは! 室長の工藤です。

今回は、藩政時代の村々の家が所有していた馬について述べてみようと思います。

『新青森市史』資料編近世(2)173号文書に、弘前藩主の浅虫迄の移動ルート上にある村々(入内村～浅虫村)の村況を記した文久元年(1861)の記録が掲載されています。

これによると、各村の戸数1戸当たりの平均馬数は、小館村3.10疋・高田村0.97疋・荒川村2.75疋・ハツ役村1.77疋・浜田村2.10疋・堤村1.31疋・浦町村1.37疋・作道村0.92疋・原別村1.70疋・久栗坂村0.26疋・根井村0.53疋となります。小館・荒川・浜田の3か村が2疋以上で、これらの村々のなかでは馬を多く抱えている村落といっていいいでしょう。一方、久栗坂・根井の陸奥湾沿岸の2か村は1疋にも満たない、極端に馬数が少ない村落であるといえます。

さて、ここで1戸当たりの平均馬数が3疋を超えている小館村に注目してみましょう。明治初めの記録『新撰陸奥国誌』によれば、同村は田畑の生産力が乏しく農閑期の副業として炭焼きをやっていたとあります。さらに、幕末期小館村のようすについて記した『新青森市史』通史編第2巻によれば、全戸数25戸のうち15戸が「田を中心とした農耕だけでは経営を維持することができない」状況にあり、「何らかの形で経営の補填がない限り、経営を維持することはできなかった」と評価しています。

さきの『新撰陸奥国誌』の記述にしたがえば、炭焼きによって「経営の補填」がなされていたとなりますが、1戸平均3疋を超す馬を抱える家が、その畜力を農耕と山仕事だけに利用していたとは考えにくく、一年を通じて利用するという視点から考えると馬は「駄賃稼ぎ(駄送)」に利用されていたとみられます。

小館村は浪岡村から高田村までの約12kmにわたる街道筋にあります。この街道は19世紀初めには降雪期の馬の通行が可能になっています。万延元年(1860)の滑稽本『御国巡覧滑稽噺盡戯』の主人公弥太八と喜次郎兵衛もまた、浪岡村から浅虫村へ向かう際に小館村を通過しています。小館村の人々はこの街道を利用した駄賃稼ぎにより「経営の補填」をしていたのではないのでしょうか。



弥太八と喜次郎兵衛の旅のルート

No.	村名	No.	村名	No.	村名
1	本郷村	9	入内村	17	造道村
2	吉内村	10	小館村	18	原別村
3	中野村	11	高田村	19	野内村
4	浪岡村	12	荒川村	20	久栗坂村
5	五本松村	13	ハツ役村	21	浅虫村
6	羽黒岱	14	浜田村	22	青森町
7	王余魚沢村	15	堤町		
8	一の沢	16	茶屋町		

【表】弥太八と喜次郎兵衛が訪れた村

ところで、小館村の東側に野沢村があります。ちょうど小牧野遺跡がある辺りが野沢村です。同村は小館村とおなじく田の生産力の低い村でした。ここで注目したいのは、小牧野遺跡の環状列石に「馬頭観世音」と刻み、同村の新山久助が嘉永7年（安政元・1854）に建てた碑です。この辺りにはかつて弘前藩が経営した牧のひとつ入内牧があったことから、この碑の存在を牧と結びつけて理解しようとする考え方があります。

しかし、入内牧は碑が建てられる20年以上も前に廃止になったといいます。ですから私は碑と牧を結びつけるのは難しいのではないかと思います。むしろ、隣村小館村のような馬の利用があったことを碑が示唆しているのではないかと…そう考えています。



「馬頭観世音」と刻まれた石碑（小牧野遺跡）